



むつかしくはない

ヴォケーショナル・サービス

むつかしくはない

ヴォケーショナル・サ



ま え が き

「職業奉仕」はわかりにくいと多くのロータリアンは言います。職業奉仕は会員に代わってクラブがしてあげるわけにはいかない。どうすべきかは自身で考えるべきです、他人に尋ねる必要などありません、と突き放されます。

これでは困るのです。そこでこの突破口を見付ける一助にと、大阪ロータリークラブの会員であり、第三六六地区の職業奉仕委員会委員長である塚本義隆・パスト・ガバナーにこんな解説をしてもらいました。

昭和五十一年八月

大阪ロータリークラブ
職業奉仕委員長

谷 口 尚 武

〔目 次〕

1	ロータリーの目的は唯一つ	一―三
2	わかりにくいという「職業奉仕」	四―五
3	サービスこそわがつとめ	五―六
4	「ヴォケーショナル」とは何か？	七―八
5	「職業」と「職分」のちがい	八―一〇
6	何が人間の値打を決めるか	一〇―一一
7	儲けは信頼から生れる	一一―一三

- | | | |
|----|----------------|--------|
| 8 | 二つのモットー | 一三一—一五 |
| 9 | ユダヤの宇宙法則 | 一五一—一七 |
| 10 | 青リボン賞の百姓さん | 一七一—一八 |
| 11 | 業界へ派遣するロータリー大使 | 一八一—二〇 |
| 12 | 鏡の前のロータリアン | 二〇〇—二二 |
| 13 | 商業道德の低下に挑戦せよ | 二二一—二五 |
| 14 | 企業は悪か、人間が悪いのか | 二五一—二八 |
| 15 | サービスは会員個人がするもの | 二八一—三〇 |

むつかしくはない

ヴォケーショナル・サービス

塚本義隆

(1) ローターリーの目的は唯一つ

わが国にはクラブと名の付くものが無数にあります。会員組織の社交クラブや、又、サービス・クラブと称せられるものもかす多くございます。ライオンズクラブ（一九五二年日本へ渡来）、キワニスクラブ（一九六四年日本へ渡来）など有名ですが、けれども、われわれのロータリークラブはこれらの諸クラブと根本的に異なる点があることに諸君はお気付きでしょうか。それは、ただ単に一番古い、あるいはまた、最も有力だ、ということではありません。異なるのは、ヴォケーショナル・サービスを目的としたクラブである、という一点であります。

こう申しますと、諸君は恐らく反問されるであります。ロータリーは四

大サービス部門がある。ヴォケーシヨナル・サービスはその一つではあるがと。私は、あえて申し上げます。実はそうではないのです。若し腑におちない方は「ロータリーの綱領」を一ぺん読みなおしていただきたい。

「ロータリーの目的は有益な企業の根底にサービスの理想を培うに在る」と明記してあるのです。これが唯ひとつのロータリーの目的であります。ロータリーの目的は単数であつて、複数ではない。Object of Rotaryをロータリーの綱領と翻訳されているために誤解が起るのであります。

そもそもロータリークラブの会員が職業分類という制度によつて構成されていることは、職域のサービスが要求されるのと表裏一体の関係なのです。この独特な組織を持ち、ヴォケーシヨナル・サービスを根幹とする団体は他にありません。今から七十一年の昔、青年弁護士ポール・ハリスと三人の友人によつて植えられたロータリーという若い苗木は、今日巨木に成長し、七十八万人を

擁する一大サービス・クラブとなりました。大樹は自然に大枝、小枝を派生しました。社会サービス、国際サービス、青少年サービスなどがこれです。けれども大樹の根幹はどこまでもヴォケーショナル・サービスであります。ところが、近来この根幹を忘れがちになったのはどうしたわけでしょうか。如何に枝葉のサービスに力を入れておいても、根元にもしも空洞うつつができて、巨木が弱体になるようなことがあったら、大枝、小枝も自然と活力を失って、台風の襲来でロータリーという名木も、一夜にして倒壊する恐れなしと言えないでしょう。国際ロータリーの新会長ボブ・マンチェスターは、この点に気付いて、ロータリーの根幹サービスを強調することに意欲をもやしている、と私は考えます。昨今喧しいロッキード疑獄事件などは、政治家や、官僚の腐敗にその原因があるのでなく、企業家が道義を忘れてソロバンのみを弾いていることに真の禍根が存在すると私は思うのであります。

(2) わかりにくいという「職業奉仕」

東京ロータリークラブの週報をさきごろ読んでおきますと、こんな文章が、ふと目にとまりました。(五〇・八・一三号) 『職業奉仕はロータリアンとしての資格上重要な条件であるにかかわらず、その真の意味が十分に理解されているとは言い切れないように思います。その大きな原因は日本語の奉仕という言葉の持つニュアンスのためではないでしょうか。奉仕というと、自分の財産、あるいは時間、もしくは労力を犠牲にして、第三者のために良いことをする意味にとられます。その行為によって利益を得たり、報酬を貰ったりすれば、それはもう奉仕ではないと考えられます。ところが、ロータリーでいう職業奉仕とは、ロータリーソングで *he profits most who serves the best* と歌うように、適正な利潤を得て自分の職業を通じて社会のためにつくすことで

あります。この職業を通じて社会のためにつくす職業奉仕とは何か、と更に追及すると、これはすなわち、自分の職業を成功させることになります』

このように述べておられるのは東京RCの本年度の職業奉仕委員長をつとめる福原信和さん（化粧品品の資生堂社長）であります。

(3) サービスこそわがつとめ

モリエールの喜劇に出てくる挿話にこんなのがあります。手代から成り上がった俄か紳士が名門の令嬢に手紙を送ろうとして苦心するのです。この俄か紳士さんが思案に余った末、ある文学博士の所へ手紙の代筆を頼みに参りました。そして言うには「けれども、博士、韻文と散文だけは使わないで下さいね」。面くらった文学博士は「しかし、君、それはどちらかを使うのでなければ無理だね」と申しますと、手代さんの俄か紳士は「では、博士、わたしらが日

常しゃべっている言葉は一体何ですか？」「それは散文というものさ」と博士は答えた、というのです。

「職業奉仕とは何のことだか分らない、難かしい」と文句をいうロータリアンが多いようですが、しかし、その実は、職業奉仕ほど簡単で実際的なサービスはないのです。すなわち、職業奉仕は、われわれお互いの生活における、また、職業上の日常の「散文」に他ならないのであります。右の挿話は「サービスこそわがつとめ」の第一頁にある話です。日本の第二代ガバナー井坂孝（横浜、一九三一—三三）氏は「人のために尽す道はいろいろあるが、日常不斷にできるのは、自分の職業を通じてのサービスだ。その実践こそロータリーの本領である」と申しております。

(4) 「ヴォケーシヨナル」とは何か？

ところで、職業というと「生計のための仕事」という意味に普通解釈されるのですが、英語では、日本の「職業」に該当する言葉がいろいろあります。例えば、*business, job, occupation, profession, trade, vocation* などです。ところが、この中からロータリーが特にヴォケーシヨンの字を選んで、ヴォケーシヨナル・サービスと呼んでいるのは深い配慮があつてのことと思います。それはヴォケーシヨンがラテン語の *vocatio* (神のお召し) から出ている言葉で、神の授けたもうた仕事、天[・]与[・]の[・]職[・]、天[・]職[・]という使命観を含んでいるからであります。人間が生活のために必要なさまざまな品物の生産、配給、サービスの仕事が多業化されて、個人個人へ、そのいづれかを神さまが分担せしめていくという考え方に出發しております。従つて、たとえ直接には自分の生計につ

ながる仕事であっても、同時にそれは人間全般のために役立てるといふ心掛けがあるべきなのです。「ロータリーの綱領」の中に使われている「有益な事業」とか「有用な職業」とかいう言葉にはこのような意味が含まれているのです。

(5) 「職業」と「職分」のちがい

つぎに申し述べるは東京ロータリークラブの長老会員長瀬富郎君の話であります。同君が少年のころ私淑していた海老名弾正という牧師さん（後の同志社大学総長）から聞いた話の一節だそうです。海老名先生は九州梁川藩の武士の子ですが、五、六歳のころ寒い冬の朝、お母さんと台所のかまどの前で火にあたっていました。そこへ魚屋が十二、三歳の息子を連れて入って来ました。雪はしんしんと降っています。息子は素足でわらじばき、足は寒さで赤くはれ

あがり、天秤棒で盤台をかついでいるのです。幼い海老名さんはこれを見て、母親に「魚屋の子はかわいそうですね」と言ったそうです。その時、母親は答えました。「あれが魚屋の職分なのです。お前は今、火にあたって暖かそうにしている。しかしお前にはお前の職分がある。お前はサムライの子です。殿様の命令があれば、いつなんどきでもいのちを捧げねばならぬのがお前の職分なのだよ」。この一言が幼な心に職分のきびしきというものを深く植付けられ、一生の教訓になったということ。宗教家ばかりではありません。政治家でも、教育者でも、実業人でも、おのれの職分*にいのちをかける*ということに明治の人間はすべて喜びを感じていたのではないでしょうか。

職分と職業はニュアンスが違ふと思います。たとえば天皇は明らかに職業ではありませんが、ひとつの職分だと思えます。今の天皇は戦争中も戦後もりっぱに職分を果たされたと思います。その点において大きな敬愛の念を抱きま

す。個人としては戦争がおきらいでも職分上戦争をせねばならぬ立場だったのだと思います。日本ばかりではありません。世界的に十九世紀末から二十世紀の初めにかけて、人びとの心に一種の理想主義があり、職分（別の言葉でいえば天職）に殉じようとする意気が横溢していたと思います。ポール・ハリスも、米山梅吉もその時代に生れた人間だったのです。ところが現代は、職分よりも経営をまず考えなければならぬ時代になったと、このように長瀬富郎君は嘆いておられます。

(6) 何が人間の値打を決めるか

隠岐の聖者として崇められ、八十七歳の高齢（明治22年生れ）で今もなお「水溶液中における無機化学の系統化」の研究に精魂を傾けておられる永海佐ながみ一郎という人がありますが、先生はこう言われます。「人間の価値は、その人

の社会上の地位、学歴、収入、財産、家柄、職業の種類などとは全く関係がない。それは、その人の天職に熱心な度合いと、心のキレイな度合いによって決まる」と。(ある高校教諭の授業抄録より)

(7) 儲けは信頼から生れる

東京・神田のれん街「しのだ寿司」という老舗があります。原田さんというのがその社長で、えらい苦勞人です。ある時、こんな話をしてくれました。『誰れでも物を買う時に、「この店を儲けさせてやろう」と思って買ったことがあるか？あるまい。そんなら「安く買ってやろう」と思ったことがあるか？あるだろう。そんなら、この家に来て下さるお客さんも、神田のしのだ寿司は感心だから、ひとつ儲けさせてやろう、なんていうお客さんがあるだろうか？まず、あるまい。にもかかわらず、私の店が左前になって困ったことはない。

意地の悪い目で見れば、儲けさせたくない気持ちの中から儲かっているもの、この儲けというものは一体何なのだろうか？私は、儲かったものを、「自分のものだ」と思った瞬間、そこから商人としての道が崩れる時なのだ』こういうのです。

原田さんは自分の店へ入社して来た若い人を研修生と呼んでいます。店の者の教育をどういう風にやるのかと、尋ねますと、原田さんからはこんな返答がはね返ってきます。『言って聞かせる教育では駄目ですね。例えば、五千円のお寿司を、どこどここの場所へ、バスが待っているから何時までに持ってこい、こういう注文があります。しかし何かの手違いで、持って行った時には時間が遅くなって、注文をした方はカンカンに怒って出発してしまった後なのです。届けに走った若い者が「どうしましょう」といって帰ってくるんです。』どうしまししょうじゃない。引受けた以上は責任があるんだ。乗用車でスピードを出

してバスを追いかけなさい」というようなことになるんです。若い者は「社長はバカだよ、そんなことやったら、儲けにもなんにもならんじゃないですか」「あのなあ、責任というものは、お金にはかえられないんだよ」と走ってもらうのです。「とうとう箱根で追い付きました」といって帰ってきたの報告に、「よく届けてくれたな、お前の店は信頼できる。また頼むよ」とお客に賞められました、というわけです。』（光明の人五一・五・一五）

(8) 二つのモットー

『根本的にいうと、人間はみな、自己のために利益を得ようとする欲望と、一方では他人のために尽さなければなるまいという義務感があって、両者が心の中で常に葛藤かつとうをくりかえしている。この争いを調和させようという人生の哲学がロータリーなのである。この哲学こそ、サービスの哲学、すなわち

service above self (サービス第一、自己第二) であり、そして、 he profits most who serves best (サービスに徹する者に最大の利得あり) という実践的倫理の原則に基礎を置いている。これは有名な二三―三四の決議、すなわち、一九二三年六月開催のセントルイス大会における決議です。

右のうち、 he profits most who serves best はロータリーが生れて六年目、すなわち、一九一一年八月、米国オレゴン州ポートランドの第二回大会でシカゴ・クラブの会員アーサー・シェルドンが提案して満場一致採択されたものです。他の一つの service above self (サービス第一、自己第二) はミネアポリスの初代会長フランコ・コリンズが同じ時に提案したのですが、最初の原案には service, not self (サービスだ、滅私だ) となっておりました。ところが異論が出て、後日に現在ののとおり修正されました。それ以来四十年近くを経て、一九五〇年、前述の二つの成句はロータリーの公式モットーとして承

認されたものです。

(9) ユダヤの宇宙の法則

商売は利益がなければ成り立たないが、しかし利益にはおのずから法則があるべきです。如何ほどでも儲かる丈け儲けてよい、というものではありません。豊中北R.Cの笹部政雄君は職業奉仕委員長ですが、この点について、興味のある話をクラブでされました。以下に引用させてもらいますと――

『今日、世界経済の上で支配的な実力を持っているのはユダヤ民族ですが、ユダヤ商法を支えているのは宇宙の法則だと言われます。この法則に「78:22」というのがあります。例えば正方形の面積を100とするならば、これに内接する円の面積は78である、そして四隅に残った面積の和は22になる。又、空気中の成分は、窒素78、酸素22の割合になっています。人間の身体は水分が78

で、その他の物質が22の割合で出来ているという。これは大自然の宇宙の法則であって、ユダヤ人の商法はこの法則の上に成り立っておるといいます。世の中には金を貸したい人と借りたい人とがあるが、私たちの想像では、借りたい人が多数を占めると思うでしょう。実際には全く逆で、貸したい人が圧倒的に多いそうです。それ故に銀行は繁盛する。ユダヤ論法から言うと、貸したい人が78で借りたい人が22、それで世の中は成り立っているのだそうです。企業の経営も、原価が78、利益22にすればユダヤの法則に合致するわけです。この法則に従うとすれば、職業奉仕というものは、もちろん、原価78の中でいろいろな行なわるべきであります。78の全体が一つの固まりかたであり、そこが職業奉仕の分野です。製造業を例にとれば、先ず、良い材料を選ぶ。製造に当る技術者や従業員には、細心の注意を払わせる。取引先や従業員へもいろいろと配慮をする。等々数限りないサービスの場があるはずで、サービスという言葉の代わ

りに奉仕という文字を使うと、言葉の感覚からして、78の内容がどうであるかよりも、利益の22の中から、幾分かを世間にご奉仕すれば、それがいわゆる職業奉仕だろうと誤解するロータリアンを生ずるおそれがあります』

(10) 青リボン賞の百姓さん

ある百姓さんが、とうもろこしの畑をつくり、優秀な出来ばえの作物を毎年その地方の品評会に出品して、青リボンの一等賞をもらっていました。この百姓さんは、入賞した最上等のとうもろこしの種子を隣りの百姓さんに分ち与えました。これを見て驚いたのは他村の人です。そこで、尋ねて申しました。「どうして、そんな馬鹿なことをするのですか？ 隣りの人は、あなたと競争するためにこの品評会に出てくる人ですよ。大切な上等の種子を他人にくれてやるなんて、わからんですなあ？」。これに対して、青リボン賞の百姓さんは

答えて申しますには、「いや別にわけはありませんよ。もし私が良いとうもろこしを作ろうと思えばですね、近所の百姓さんたちにも良いものを作らす必要があるのです。なにしろ、風が吹くと、熟じやくしたとうもろこしから花粉が舞い上がって、畠から畠へ飛び散らすのです。隣りのが悪いと、こちらの作物も悪いのが出来ますからね」。これは、ロータリーのヴォケーショナル・サービスの中の競争業者関係の一例でありましょう。「サービスこそわがつとめ」の本の中に出てくる話の一つです。ロータリーのサービスはロータリアンだけで独占していい、というものではありません。他の人びとにも広く分かち合うべきものであります。

(11) 業界へ派遣するロータリー大使

『ロータリアンは、ロータリーから各種職業の分野へ派遣される代表なので

あつて、各種職業の分野からロータリーに派遣される代表ではない。この解釈によれば、各会員はロータリーの大使として、ロータリーのサービスの理想を世間へ説き、ロータリーの他人に対する思いやりの精神と、ロータリーの職業倫理の水準をその同業者に伝達して同調させる任務を持っている。この任務はロータリーから会員に課せられているのである。したがつて、ロータリアンは、ロータリーの代表として、もしも同業業界において、劣悪なる思想や、いかがわしい商法がはびこつておるならば、これを廃めさせるべく努力する責任を感じなければならぬ』

右のようなはっきりした考え方を打ち出したのは一九二三年度（関東大震災の年）に国際ロータリー会長をつとめたガンデーカー Guy Gundaker でありまして、彼の著作「ロータリー通解」の中に書いております。彼はフィラデルフィアの会員であり、レストラン経営を職業分類としていましたが、会長にな

る前には、国際ロータリーの理論及び教育担当委員会の委員長を引受けていました。

(12) 鏡の前のロータリアン

「鏡の前の外科医」という名著があります。これはイタリア国立連合病院のエリンコ・ジュッポーニ博士が今から四十年昔に出版したもので、感激を覚える一書であると言われます。それによると、どこの病院でも手術室に入る前に消毒室が設けてある。その消毒室の壁には大きな鏡が取り付けられています。医師は手術室に入る前に必ずここでまず手を洗い、手の消毒をします。鏡の前に立った外科医は、鏡の中に写し出された自分の眼に問いかけるのです。「今から行なわれんとする手術は人道に反してはいないか、良心にもとらないか、己れの全能力を発揮できるか」を確かめるのです。しかる後に静かに手術室に

入ります。手術が終り、最後の縫合が行なわれると、元の消毒室に戻り、手術衣と手袋を脱ぎ、マスクをはずしてから、再び鏡の前に立つのです。なぜ鏡の前に立つのでしょうか？ 身嗜みをするためでしょうか？ そうではないのです。

私はこの動作を永年に亘って習慣づけられ、教えられたものであります。すなわち、外科医は今行なってきた手術の批判を、鏡の中の自分の目に問いただすのです。鏡の中の目から、「手術は正しく行なわれたか、全力を発揮できたか、すべて良心的に行なわれたか」と反省するのです。鏡は一瞬間にすべてを表わす。鏡は冷たく、隠蔽することを知らないであります。私は外科医として鏡の前のそれでありたいと同様、鏡の前のロータリアンでありたいと念願してすでに三十有余年になります。この話は、自分独りの理想として、今日までは誰れにも話さず胸に収めて来ました。

右の回顧談は、本年五月号のロータリーの友に掲載された三宅徳三郎ガバナ
ー（高松RC）の話であります。

(13) 商業道德の低下に挑戦せよ

本年四月十七日、大阪のフェスティバル・ホールで開催された第三六六地区
の年次大会では次のとおりの決議第四号が満場一致で可決されました。

いわく――

決議第四号

商業道德低下に挑戦しフォアウェイ・テストの活用を推進する件

「吾人は道義を無視していわゆる事業の成功を獲んとする者に与せず」とは
昭和十一年、当時の第七〇地区大会（神戸）における宣言の一節であるが、四

十年後の今日、またこれを反復する必要を痛感することは残念至極である。近時、新聞、雑誌、テレビは毎日の如く商業道德低下の実例を伝えている。われわれロータリアンは敢然これに挑戦し、卒先もって世に範を示すべき責務がある。このためには改めてフォアウェイ・テストの活用を極力推進することにより道義の向上に努力すべきである。

右決議する。

右に言う昭和十一年の宣言とは、当時の大連ロータリークラブが提案したもので、五ヶ条から成っております、日本ロータリー五十年史にも掲載されています。

ロータリークラブは創始以来、ヴォケーショナル・サービスを中心として活動してきた関係上、商業道德については絶えず厳しい態度で臨んできました。ロータリー創始十年目、一九一五年七月、サンフランシスコにおける第六回大

会では、有名な「ロータリーの道徳律」 The Rotary Code of Ethics というのを定めました。これは百語から成る前文と十一ヶ条の本文とから出来ておりまして、今日でもその存在が手続要覧（第二一四ページ）に書いてあります。しかし、残念なことには、日本語の定訳がありません。私は四年前、大阪ロータリークラブから刊行した「サービス思想の意味するもの」と題する小冊子の中にこの全文を翻訳して記録いたしましたので興味を持たれる方はお読みいただきたい。今日の世相に関連して、特に諸君の関心を惹くと思われるのは、この中の第三条および第九条であります。すなわち――

（第三）われは実業人であり、成功するべく大望を抱くのは事実である。さりながら、われは先ずもって徳義を重しとする人間であり、最高の正義と道徳にもとづかざる成功は、これを欲するものでないことを自覚する。

（第九）社会通念の上から普通人が拒絶するような機会を不当に利用して、こ

れによってかち得た人の成功は、これを合法的ないしは徳義に叶うものとは認容しない。同様に、道徳的に疑問があつて他人が退けている機会をば、わが物質的成功のために利用するが如きは、われは決してこれを行わない。

(14) 企業は悪か、人間が悪いのか

大阪ロータリークラブは本年二月二十七日、「企業は悪か、利益は悪か」という題の下にクラブ・フォーラムを開きましたが、その終りに亀井正夫職業奉仕委員長は次ぎのような言葉を述べました。

『たくさんの方から非常に貴重なご意見をいただきましたのですが、全体を通じて流れているところは、企業が悪か、利潤が悪かという発想は非常に単純であつて、むしろ企業のあり方、あるいは利潤の上げ方ということが本質的な

問題だ。それについては、倫理観、道徳観というものが必要じゃないか、こういうご指摘かと思えます。成熟社会という本を書いたガボールという人も、成長社会ではIQといいますが、知能指数が非常に重んぜられたけれども、成熟社会になってくると、倫理指数というエシカル・コーシエンツ、EQが大事だということをおっしゃいます。私ども企業人といたしましても、やはり倫理観というものを重視する必要がある。

それで、はなはだ口幅ったいことですが、私ども住友の先輩に伊庭貞剛という方がおられました。この方が、「君子財を愛す。これを取るに道あり」という夢窓国師の言葉を常に住友の社員に説いておられたということでございます。私どもは、企業が悪か、利潤が悪かということを問う前に、やはり私どもは踏むべき道を踏んでいるかどうかということをおられたというのを常に反省して、やっていくことが、これすなわち、またロータリアンの職業奉仕の道にも通ずるか

と、こういうふうに存ずる次第でございます』

また、大阪南ロータリークラブの池田幹雄会員（アセチレンガス製造）は同クラブ会報（本年七月号）上で次のような傾聴すべきご意見を發表しておられます。

『私達は社会集団の一員として存在することは当然のことであり、又、社会集団の一単位である企業の構成単位として殆んど人は属しております。従つて人々の関心の多くは所属企業の内外関係に向けられ、大企業になれば内部関心が重点となり、企業の繁栄に奉仕することが、従業員として最も美しい姿である、と信じて疑わない人々が多く存在します。また、かかる傾向の人々が高い地位と権力を握り、社会に強い影響力を持つ場合が多いのが現状だと思ひます。』

私は一旦企業が利益追求のため本来人間個人の集団である社会の本質を考えずに、本質とは相反した方向を指向した場合、その企業の従業員個々が如何に

善であれ、一集團の悪として社会より疎外されざるを得ないと考えます。

私は自由民主資本主義社会が、より良きものへと一步前進するためには、社会における正しき道とは何かという事を考え、社会構成の原因である人間としての正しき道とは何ぞや、ということを深く思考する必要があると思います』

(15) サービスは会員個人がするもの

ロータリー精神、すなわち、サービスの精神が現在ほど要求される時代はあ
るまいと思います。それは、高度経済成長から来た今日の世相が余りにも利己
本位に走り、他人の立場を考えず、思いやりの心が失われつつあるように感じ
るからです。

ロータリーのすべてのサービスは個人のサービスを主眼としますが、こと
に、職業に関しては、クラブの中においても、又、業界においても、サービス

ができるのは会員個人を措いて他には誰れもないのだ、という認識が必要であります。それはクラブ会員となった瞬間にロータリアン一人一人に背負わされた義務なのです。その義務とは、自己の職業における道德水準（＊それはフオアウェイ・テストの二十四語に照らせば判ります）を向上させると同時に、ロータリアンに非ざる他の人々、ことに自分と同じ分野で活動している人びとに対しても、自らロータリー精神に叶う仕事ぶりをもって率先垂範して、彼らにも同調を求むべきだということでもあります。この義務は新会員に対して入会当初によく理解させておかなければなりません。また、その後においても折りにふれてこれを強調しなければなりません。また、この義務がよく果たされていくかどうか、会員めいめいに対してクラブは質問する責任と権限をもっております。

(*) フォアウエイ・テストを原語で掲げますと次のとおりです。

THE FOUR-WAY TEST

Of the things we think, say or do

1. Is it the TRUTH?
2. Is it FAIR to all concerned?
3. Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIPS?
4. Will it be BENEFICIAL to all concerned?

(おわり)

国際ロータリー第三六六地区職業奉仕委員会

委員長	塚本義隆(大阪)
委員	増田鼎(八尾)
委員	塩路浩一(御坊)
委員	菅井康郎(和歌山東)
委員	好本清勝(和泉)

むつかしくはない

ヴォケーショナル・サービス

昭和五十一年八月二十五日発行

大阪ロータリークラブ

02